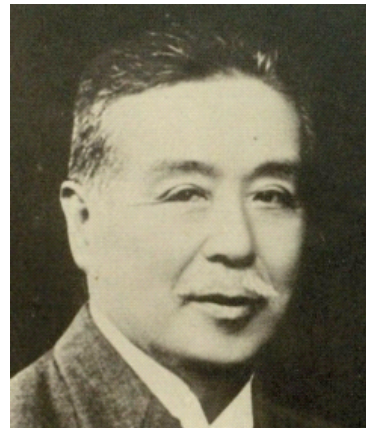


百年先の人々のために

廣井 勇

現在、多くの観光客でにぎわう小樽市。明治の初めから漁業や海運業が盛んでしたが、小樽港をおそう日本海の荒波は、船や陸上の施設を破壊し、人々をなやませていました。



〔「工学博士廣井勇伝」 工事画報社〕

その小樽で、世界でも前代未聞の工事が始まったのは、一八九七年のことです。

廣井勇は、一八六二年、土佐国（現在の高知県）に生まれました。幼少の頃に父親を亡くしましたが、悲しみを乗りこえて、学問で身を立て、家族を支えていく決心を固めました。

遊びたい盛りにはげみ、一八七七年、札幌農学校（現在の北海道大学）に入学しました。当時の北海道は、うつそうとした原生林におおわれ、札幌市の人口も三千人ほどでしたが、開拓により、新しいことを始めるエ

ネルギーに満ちあふれていました。

札幌農学校で土木工学を学んだ勇は、「私は、私にしかできない何かを残したい。北海道の発展に貢献する人間になるんだ。」という志を立て、一八八三年、世界の先端技術を学ぶため、二十一歳でアメリカへ渡りました。アメリカでは、働きながら血のにじむような努力を続け、優秀な技術者として二十七歳で帰国した後、札幌農学校の教授となります。そして、学生たちに教える一方で、北海道庁長官に次のような提案をしました。「北海道の発展のためには、鉄道も開通した小樽港に防波堤を建築し、強化するのが最善だと私は考えます。」

当時本州の港で試みられた防波堤工事でもコンクリートがくずれる事故が多発し、波の荒い日本海でそれを行うことは無理だと考えられていました。しかし、勇の熱意と粘り強い説得により、ついに空前の大事業が始まったのです。「日本海の荒波にたえられるコンクリートの製造が成功のかぎになる。」小樽築港事務所に就任した勇は、どのようにするとコンクリートが強くなるのか、年月とともにどのようなかわらっていくのかを調べるため、試験用コンクリート三百六十四種、六万個を準備し、昼も夜も実験

をくり返しました。その結果、海水に耐えることができる、火山灰を混ぜ合わせて作る独自の製法を考え出したのです。

勇は、作業用機械の設計も担当する一方、自らシャベルをにぎって若い作業員にコンクリートのねり方を教え、ときには海中にもぐって土台の様子を確かめました。

ある夜、勇の乗った列車が札幌から小樽へ向かう途中、吹雪で動けなくなったときには、「建築中の防波堤が心配だ。」と言って列車から飛び出し、腰まである雪をこいで、深夜まで歩き続け防波堤へ向かいました。翌朝、かちかちに凍りついた作業服のまま、防波堤の上に立つ勇の姿を見た作業員たちは、自分たちの仕事の重みを心の底から感じたと言います。

一九〇八年、実に十一年の時を経て小樽港北防波堤は完成しました。勇は防波堤の上で、ともに難工事にいどんだ仲間への感謝の言葉に続けてこう言いました。「これで終わったわけではありません。防波堤は長い年月にたえてこそ、初めて成功と言えるのです。」



〔小樽市街と小樽港 ※枠内が北防波堤〕

完成から百年以上たった今も、防波堤は補修されるところなく小樽の町を守り続けています。そして、当時行われていた試験用コンクリートを使った実験は、今も絶え間なく続けられているのです。

一八六二	土佐国（現在の高知県）で生まれる
一八七七	札幌農学校に入学する（十五歳）
一八八三	アメリカへ渡り、技術を学ぶ（二十一歳）
一八八九	帰国して札幌農学校の教授となる（二十七歳）
一八九七	小樽築港事務所長に就任し、小樽港北防波堤の建設工事を開始する（三十五歳）
一九〇八	北防波堤が完成する（四十六歳）
一九二八	東京で死去する（六十六歳）

＊海運業…船を使ってたくさんの品物や原料などを各地へ運ぶ仕事

＊防波堤…外海からの波を防ぐために海中に設置された構造物